

# 2020年度「平和カンパ」活動ご報告

2021年5月31日

(特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター 南アフリカ)

## 生活協同組合パルシステム東京の皆さん、ご支援を賜りましてありがとうございます。

JVCは南アフリカの北部リンポポ州ベンベ郡の農村地域で、エイズで親を亡くすなど、困難な家庭環境下にある子どもたちの支援を行っています。活動村にはこうした子どもたちが通う「子どもケアセンター」があり、主に村の女性たちが担う「ケア・ボランティア」によって運営されています。JVCはケア・ボランティアの育成(ケアに関する研修の提供)や、ボランティアと学校など村の関係者で子どもたちをサポートしていくための地域づくりのほかに、10代の子どもたちが将来のことを自分たちで考え、道を切り開く力につけるための「リーダーシップ育成／ライフスキル研修」の活動も行っています。また、食べものを得ることすらままならない子どもたちが多いなかで、センターの敷地でボランティアたちが、身近な資源を活用してお金をかけないで菜園づくりを学ぶための研修を行っています(収穫したものは給食として提供します)。

2019年度から2村の子どもケアセンターを新たなパートナーとして活動を始めました。2020年度は2年目として、特に、ケアに関する研修や10代の子どもたちへの研修を本格化させていく予定でしたが、南アフリカでは、COVID-19感染拡大を受けて3月から全土ロックダウン(封鎖)が開始されました。これに伴い、学校閉鎖→子どもケアセンターも閉鎖を余儀なくされています。このため、子どもたちの状況が懸念され、ロックダウンによる移動制限が緩和された6月半ばから、JVC南アフリカの現地スタッフとケアボランティアで子どもたちの家庭を訪問、状況把握調査を行いました。

その結果、子どもケアセンターに通ってくる子どもたちにとっては、その厳しい家庭環境ゆえに、学校での給食(朝11時にパンなどが提供されます)とセンターでの給食(放課後に提供)が大きな意味をもちますが、COVID-19の影響を受けて両機関が閉鎖されたことで、まともな食事にありつけない日がある子どもが少なくなく、あるいは子どもたちが家にいる分の食費が家計に重くのしかっている状況が確認されました。

これを受け、センター閉鎖(2021年4月まで閉鎖)により研修等の通常の活動が行えないなか、子どもたちを取り巻く厳しい状況を受けて、2020年7月から3月まで子どもたちの家庭への緊急食料・衛生用品支援を6回実施しました。



JVC南アフリカ事務所として緊急食料支援は初めての経験でしたが、村長が写真に掲載のトラックを貸してくれたり、お店の人も配達してくれるなど、多くの方の協力を得て行われました。冷蔵庫がない家庭も多いため、保存できるものを配布。主食のモロコシ粉、魚の缶詰、油、豆、塩、砂糖、パスタ、野菜缶など食料のほかに、衛生用品として石鹼、洗剤や歯磨き粉も配布しました。



子どもケアセンターの敷地を利用して配布。ソーシャル・ディスタンスに気をつけ、マスクを着用して行いました。支援の漏れがないよう、子どもたちの名簿を用意、チェックしながら配布しました。配布はケアボランティアと協力して実施しました。



【左】祖母(左から2人目とだけ暮らす子(中央)。【中】同じく祖母と暮らす子(左はJVCスタッフ)。【右】シングルマザーの世帯も非常に多く、中には子どもだけで暮らす世帯も。食料支援は、子どもだけではなく、その家族にも非常に喜ばれました。

JVCは、2017年度までも、別地域で類似の活動をしていたことから（「平和カンパ」ずっとご支援いただいてまいりました）、前活動地の子どもケアセンターに通う子どもたちの状況も心配され、状況を確認しました。その結果、親がいない世帯はさることながら、出稼ぎをする保護者等も仕事がなく収入が途絶えるなど、全員が厳しい状況に置かれていることが判明しました。しかし、その一方で、活動のなかで自宅での菜園づくりを学んだ10代の子どもたちが、この間、自分で菜園をつくり、暮らしを支えている様子が確認されました。菜園づくりは暮らしを支えるだけではなく、学校にも行けず、友人にも会えないなかで、自ら役割をもって家族の役に立つことが、精神的な安定につながっているとの声も多く聞かれました。

また、現事業地のムペゴ村のケアボランティアらも、2019年度から菜園づくりの方法を学んでいます。多くが、シングルマザーですが、子どもケアセンターが閉鎖され、政府（センターが登録されている社会開発省）からの活動手当への支給がない=収入がないなかで、全員が菜園からの収穫によりこの間の暮らしを支えていることがわかりました。

これらのことから平時の活動が、今回のような緊急時に有効であることが確認されました。このことを受け、感染拡大の第二派、第三派に備え、現事業地においても子どもたちの自宅での菜園づくりを急ぎよ開始することにし（本来は他の活動の成果が出た3年次以降に実施予定でした）、9月からセンターの敷地で苗づくりを行うなど準備を開始、10月から子どもたちの自宅の敷地で研修を実施しました。



2017年度までの活動地で支援していた子どもたち。家庭環境は厳しいが、自分たちで菜園をつくり、家族の生活を支えています。家族を支えているという自信が、厳しい状況下で自分の支えにもなっていると話してくれました（背格好、髪型が似ていますが全員違う子です）。



2019年度に、菜園づくり研修を受けたケアボランティアたちの自宅の菜園。COVID-19下で子どもケアセンターが閉鎖され、収入も途絶えるなか、多くがシングルマザーですが、菜園から食べものを得ることで、暮らしを支えてきたとのことです。



【左＆中央】特に生活状況が厳しく、DICに通う10代以上の子どもがいて、かつこれまでに菜園を全く作ったことがない世帯を優先して10月から菜園づくり研修を始めました（開始した10月は夏季＆雨期なので、主食のメイズだけは植えている世帯もあり、こうした世帯は2021年度から研修開始予定）。まずは畝づくりを学び、毎月訪問して、適宜アドバイスしたり、一緒に作業するなどフォローアップをしてきました。【右】その結果、年明けには少しずつ野菜を収穫できるようになり始めた世帯もあります。食べものを継続的に得られるだけではなく、節約したお金で学用品を買ったといった声も届いています。

【上】食料配布後は家庭訪問を行い状況確認を行いました。食料配布が大きな支えになっていることが分かった一方、ほとんどの子どもたちが予想以上に厳しい家庭環境下にあることがわかりました（親が病気、10人が月数千円の子ども手当に頼っているなどなど）。JVCとしても、永遠に食料支援の継続は不可能ななか、10月からは、自宅での菜園づくり研修を開始しました。【下】子どもたちの自宅に植える苗づくりを行うケアボランティアたち。

ご支援誠にありがとうございました。引き続きよろしくお願ひいたします。